

# 小中移行期における「学校不適応」に関する研究

## — 中1ギャップに注目して —

学校教育学専攻

臨床心理学コース

M 0 9 0 5 1 G

奥 澤 嘉 久

### 1 【問題と目的】

近年、生徒指導の諸問題の一つに、小学校6年生から中学校1年生の移行期において子どもたちが十分に適応できない現象が増加し、注目されている。いわゆる「中1ギャップ」(児島 2006; 新潟県教育委員会 2006)である。

生徒が小学校から中学校へ移りゆくとき、周囲を取り巻く環境が変化する「環境移行」(小泉 (1997) や、中学校での新しい学習形態にうまくついていかねばならないことなど、大きな段差を感じてしまう。また、都筑(2006)は、発達段階から見ても様々な脆弱性を抱えている子どもや、思春期において対人的なつながりを健全に作り上げていない子どもの場合、思春期という危険な状況に直面したときに、発達上の危機に陥ってしまう可能性が高くなるという指摘がされている。

石隈(1999)は、学校心理学の立場から3段階の援助サービスを掲げ、なかでも子どもを対象にした一時的援助サービスとして、入学時の適応を援助する働きかけの必要性に言及している。また中央教育審議会答申(2006)においても、中1ギャップについて提言があり、教育現場における喫緊の問題として重要視されていることが伺える。

そこで本研究では、以下の2点を目的とした。①子どもたちの小学校から中学校への適応過程を縦断的に調査し、小中移行の時期に

おいてどのような心理的变化が起こっているのか明らかにし、どのように学校に適応していくのかを検討する。②小、中教師の「中1ギャップ」の捉え方について分析し、学校現場には子どものギャップだけでなく教師間のギャップについても明らかにし、小中連携のあり方を検討する。

### 2 【方法】

#### 調査1 (児童生徒向け：縦断調査)

- ・フェイスシート(学校名、性別、誕生日、イニシャル、家族構成)の基本属性
- ・時間的展望尺度(都筑, 2001)の12項目(4件法)教育環境適応尺度: ASE II(小泉, 1997)の24項目(4件法)
- ・期待・不安尺度(小泉, 1997)の42項目(4件法)

#### 調査2 (小、中教師向け)

- ・フェイスシート(所属、性別、教師歴、担任歴)
- ・小学6年生、中学1年生の喜び悩み等。
- ・小、中教師の生徒指導、学級経営の違いについて
- ・「中1ギャップ」の原因
- ・小中連携のあり方について(自由記述)

### 3 【結果】

#### 1) 3つの尺度間での因子の相関

- ①「時間的展望」と「教育環境適応」と「期待・不安」にそれぞれに弱い相関が見られた。
- ②各因子間の関係を調べるために、Pearson

の相関係数をもとめた。その結果「学習意欲」と「計画性」( $r = .519, p < 0.1$ )、「自校への関心」と「対人関係・学習での期待」( $r = .529, p < 0.1$ )、「学習意欲」と「対人関係・学習での期待」( $r = .427, p < 0.1$ )「将来目標の渴望」と「対人関係・学習への期待」( $r = .432, p < 0.1$ )にかなりの相関が見られた。

## 2) 期待・不安による分類

期待不安尺度の下位尺度得点に対し、非階層的クラスタ分析を用いて、4つのクラスターに分類した。それぞれ「高対人不安・高学習不安群」(138名)「低対人不安・高学習不安・低学習期待群」(68名)「低対人不安・低学習不安群」(81名)「低対人不安・高対人学習期待群」(37名)と命名した。

## 3) 各群の適応感の状態

期待・不安の特徴による適応の違いを検討するために、教育環境適応尺度の5つの因子それぞれに対し、群(4)×時期(3)の2要因分散分析(混合計画)を行った。分散分析の結果、「学校に対する不満」「対教師関係」「学習意欲」「級友関係」「自校への関心」のすべてに群の主効果と時期による主効果が有意であった。交互作用はなかった。

## 4) 男女ごとの適応感の状態

男女での適応の違いを検討するために、教育環境適応尺度の5つの因子それぞれに対し、性(2)×時期(3)の2要因分散分析(混合計画)を行った。

分散分析の結果、5つの下位因子についてすべてに時期の主効果があった。性の主効果は、「学校に対する不満」「対教師関係」について有意な結果であった。交互作用はなかった。時期と性の主効果については、「学校に対する不満」は3月<6月<9月であり、女子が有意に高かった。「対教師関係」は、9月<3月,6月であり、男子が有意に高かった。

## 5) 学校適応感を規定する要因

『教育環境適応感(ASE II)』への重回帰分析を行った。その結果6月時点の男子は、小学6年3月時での「空虚感」・「対人関係の不安」・「対人関係の期待」。女子は「対人関係の期待」・「部活動への期待と不安」が大きな影響を及ぼす。

## 6) 小中教師の「中1ギャップ」の捉え方

中学入学前の児童の気持ちや入学後の生徒の気持ちについて何らかの変化や課題を感じている教師が多いことが今回の調査(KJ法による分析等)で分かった。また、子どもの成長という一つの目標に向かって小中教師が協働していけるような研究をすすめ、小中連携の在り方を改めて見直す意見が多かった。

## 4【考察】

中学校入学前後の移行期において、児童生徒の注目すべき特性や属性を明らかにしたことは、児童生徒個々や学級への心理的ケアのあり方を焦点化できる。さらに、縦断調査の結果から、中学校入学前と入学後の4ヶ月間が教育的介入において特に留意する期間であることを示唆しており、より予防的対策が具体化できるものと思われる。

小中教師の指導・支援に対する意識の違いは存在し、「中1ギャップ」の克服の対策としての小中連携をすすめる上で課題があることが明らかとなった。子どもの成長という一つの目標に向かって小中教師が協働していけるような研究をすすめ、小中連携のあり方を改めて見直し、再構築していくことが必要ではないかと考える。

主任指導教員 岩井圭司
指導教員 岩井圭司